Title	キリスト者学生として地域社会で福音に生きる （テーブルディスカッション発題）
Author(s)	桑島,みくに
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 166-170
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5315
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

テーブルディスカッション発題

キリスト者学生として地域社会で福音に生きる

桑島　みくに

1．はじめに

二〇一一年三月一一日、私は島根県のキリスト教愛真高校で寮生活を送っていた。祈り、被災地に関心を向け、チャリティー活動などを心がけてきたが、遠い地に思いを寄せ続ける難しさを覚えた。

大学生になりＫＧＫ（キリスト者学生会）に関わる中で、クリスチャンのコミュニティに籠もった信仰生活ではなく、キリスト者として一貫して社会の中の弱者に仕えたいという思いが与えられ、ＫＧＫの被災地ボランティアに参加した。

2．いわきボランティア

二〇一三年七月、ＫＧＫでいわき市富岡町泉玉露（いずみたまつゆ）応急仮設住宅に訪れ、同盟基督教団泉グレースチャペルの増井恵

先生のもと「夏休み子ども教室」のお手伝いをさせていただいた。仮設には原発事故により避難した富岡町の方が住んでおられる。

（1）ニーズの変化

全力で子どもたちと遊び、彼らの笑顔に逆に励まされた。しかし震災が思い返される時には、「思い出したくない」、「はやく家にかえりたい」といった彼らの少ない言葉に不安とストレスがこめられていることを感じた。避難所の移動、家族の分断、精神的病、原発への複雑な思い。二年がたち、ハード面の復興支援から、人との繋がり、傷の癒やし、コミュニティ形成などソフト面への課題の移行を知り、時間をかけて寄り添う必要を感じた。

（2）教会の地域での役割

私は大学でまちづくりや地域コミュニティ、地方自治について学ぶ者として、将来地域を創造していく意義を確認させられた。増井先生は震災後から仮設に継続的に関わり、自治体、社会福祉協議会、小名浜ボランティアセンター等と連帯し、信頼関係を築き、地域コミュニティ再生に貢献しておられた。関係に傷が付いたコミュニティ同士を繋いでいく役割を、先生を通した教会が担っていることを感じた。地域社会のニーズに応えようとする働きは、キリスト者として社会的責任を担う信仰生活そのものであった。先生の働きに、高校時代に出会った沖縄で基地反対運動をされている牧師先生の、「社会問題に取り組むことも牧師の仕事も私にとっては何の矛盾もなく、一致したもの」という言葉を思い出した。キリストが真の福音を語り続けると同時に、弱い者と共に生き、体の必要にも応えてくださったように、キリスト者が社会のどの場においても仕え、教会が地域の拠点としてその役割を担うことができるのではないだろうか。

3. 被災地外の者として

震災から三年、復興は始まったばかりだ。私は被災地と外との狭間を、また社会と教会との狭間を行き来しながら、自らの現場で福音に生きることで役割を担いたい。

（1）被災地に関わる理由

私は横浜のかもい聖書教会に所属する一キリスト者として関わりたい。「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです」（Ⅰコリント一二・二六―二七、新改訳）。違う教団教派であれ、公同の教会はキリストの救いにおいて、既に一致が与えられている。同じキリストを見上げる群れとして、弱さを抱える地には、キリストがされ、「あなたも行って同じようにしなさい」（ルカによる福音書一〇・三七）と言われたことに従って、共に仕えたい。

（2）被災地との関わり方

多くのボランティア団体が撤退した現在こそ、キリストの愛に押し出されて被災地に訪れ、出会った方々を覚えて祈り続け、地道で長く続く寄り添い方をしたい。

また、与えられた学びや志を用いて社会に仕え、問うキリスト者でありたい。震災を通して見えた、犠牲の上に成り立つ社会の構造、社会的罪を悔い改め、問い直すべき時だと思う。そして神様の秩序を基準にかたく立ち、忘れられて

いく弱さを覚え続け、国と大衆に訴え続けなければならないと思う。政治・行政の賜物を為政者たちが正しく使うことができるよう、見張り、祈り続けたい。キリスト者として真理を選択する時に伴う苦難の中でも、神様にのみ希望をおきたい。

そして、学びを通して関わりたい。被災地では、コミュニティの分断や、今後の生活再建など、地域の課題は山積みだった。私は学びと神の国を分離することで福音を狭く捉えていたことに気づき、地域政策を学ぶ者として、地域社会における神の国の建設のために用いられたいと感じた。教会が相互扶助、愛の共同体として地域社会への証し・模範として用いられることを願う。

三・一一後を生きる世代として、自らの現場で福音に生きることを通してそれぞれが応答してほしい。

4. まとめ　三・一一後を生きる

最後に、教会への問いかけをしたい。私は高校時代、様々な教団教派の友人や教師の中で聖書観の違いに戸惑い、頑なになるほどキリストから離れている自分に気づいた時、信仰が砕かれ、イエス・キリストが私の弱い欠けの部分に入ってくださったことを経験した。すると、共にキリストを見上げる友人と、キリストの愛に押し出されて、共に生き、労し、仕えることが喜びとなった。キリストにおける一致を確認する時、個の力は小さくてもキリストのからだとして、日本の地に、愛のうちに建てられていきたい。「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです」（エペソ四・一六）。愛を語る教会同士が、それぞれのアイデンティティは保ちつつも、キリストにあって愛の一致をしてほしいと願う。

キリストが生きた福音から、救いを与えることと弱さに寄り添い仕えることは一致したものであることを改めて確認させられる。社会の中の弱い者とともにキリストが苦しんでおられる。一キリスト者、一国民として、社会において何を用いて福音に生きるか。私はいま、被災地の外にあって問われ、そこから応答し続けて生きたい。